



児童自ら学びを深める算数科授業の創造～一斉授業を軸とした協働的な学びや個別(最適)な学びの取組を通して～

「挑戦と創造」学び深く 志高く 未来を拓く

研修だより

令和8年 7 月 29 日
世羅町立せらひがし小学校
No.11

児童の困り感から「めあて」を設定する授業づくり

研究主題関連：児童の『困り感』を可視化し、主体的な問い（めあて）へつなげる指導の工夫

形態：学年部協議 → 全体交流

1. 本日の研修の目的

指導者側の「教えたいこと」からスタートするのではなく、「子どもたちがどこで立ち止まり、何を解決したいと感じるか（困り感）」を出発点とした授業構想の具体的手順を学びます。

単元の中の1時間を具体的に分析し、児童の思考に寄り添った「課題（めあて）」と「ゴール（まとめ）」のつながりを明確にすることを目的とします。

2. 研修の進め方・作業手順

ステップ①

単元の決定
〈学年部〉

→

ステップ②

問題場面の分析
〈学年部〉

→

ステップ③

ゴールの想定
〈学年部〉

→

ステップ④

めあての検討
〈学年部〉

→

ステップ⑤

構想の交流
〈全体〉

【ステップ①】授業（プレ研究会）の決定 〈学年部〉

2学期に実施予定の「プレ研究会」として取り扱う1時間の授業（単元および本時）を決定します。

- ・選定の視点：児童が「おや？」「どうやるんだろう？」と疑問を抱きやすい単元・時間

【ステップ②】問題場面の分析（児童の困り感の抽出） 〈学年部〉

決定した1時間の授業で提示する「問題場面」を思い描き、以下の3つの観点から児童の思考を分析します。

- ・① 既習事項との違い：これまでに習った知識・方法だけでは解決できない「ズレ」は何か？
- ・② 児童が困りそうなこと（困り感）：どこで手が止まるか？何について悩むか？
- ・③ 児童に見付けてほしい気付き：この困り感を通過することで、どんな発見や法則にたどり着いてほしいか？

【ステップ③】ゴールの想定〔まとめの記述〕 〈学年部〉

授業の終末で、「子どもたちが最終的にどのような『まとめ』をノートに書いている状態を目指すか」を具体的にイメージします。

- ・本時で身に付けさせたい見方・考え方：どのような視点で捉え、どのように思考させたいか？
- ・必ず入れてほしいキーワード：数学的な考え方や概念を表す言葉（例：共通する、倍数、整理するなど）
- ・書き出しが難しい児童への配慮・手立て：
 - [文頭の提示] 「～を使えば…」 「～と比べて…」
 - [思考の枠組み] 「図（表）を使うと…」 など、記述のハードルを下げる工夫

【ステップ④】「めあて」の表現の検討〈学年部〉

ステップ②の「分析」とステップ③の「ゴールの想定」をつなぐ「めあて」の表現を考えます。（※複数案出して比較検討してください）

💡 「めあて」設定のポイント

- ・綺麗すぎる大人の言葉にまとめない。子どもから自然と出てくる言葉遣いを意識する。
- ・「～を考えよう」「～を説明しよう」と一律に限定しない。
- ・児童の「どうすればいいの?」「本当にそうなのかな?」という思考を揺さぶる【問いの形】を意識する。

【参考】「めあて」の問い方のバリエーション（令和7年度5年生「公倍数と公約数」の授業講話より）

問いの切り口	めあての表現例	児童の思考のベクトル
① 方法を問う	同時に出る時間をどのようにすれば見付けられる?	解決への見通しを持たせる
② 手段・整理を問う	どのように整理すれば見付けられる?	表や図などの数学的活動を促す
③ 概念の関係を問う	2つの倍数が重なるのはどんな時?	既習事項と新概念（公倍数）を接続する
④ 規則性を探る	2つの倍数のきまりを見付けよう	最小公倍数へ導く探究心を育む
⑤ 適用・予測を問う	噴水が出る時刻を予想できるか調べよう	活用・思考の拡張を促す
⑥ 妥当性を確かめる	本当に次に同時に出るのか調べよう	批判的思考や確かめ算の意識を持たせる

【ステップ⑤】構想の交流〈全体〉

各学年部で作成した構想を発表し合い、全体で視点を共有・協議します。

・共有する内容：

1. 対象となる単元・本時の問題場面と、その分析（困り感）
2. どのような「めあて」が想定されるか（どのような問いかけか）※柔軟に対応できるよう、予想されるものを複数考えておく。
3. どのような「まとめ」を書いてほしいか（ゴールイメージと手立て）